

かに弾かれたように、私にははつきりとわかったのです。これまで漠然としていた看護師という職業への意識が形を持ち、私を突き動かそうとしていることが。この時から母は私の目標になったのです。

その後、母に看護師の仕事についていろいろと尋ねてみました。

「ねえ、どうして、お母さんは看護師さんになろうと思ったの？」母はこう答えました。「人と言葉を交わしながら心を通わせられる仕事だと思ったからよ。」私がつなぐと

「でもね、看護師になってつらい事は、やっぱり人の死だよ。どんなに看病しても、手を尽くしてもだめだった時なんか、すごくシヨックだよ。人間の命は、人間がコントロールできるものじゃないからね。言葉で伝えるのはとつても難しいけど、佳伽が看護の道を進むようになったら、わかる時が自然と来るよ。」と続けてくれました。

母のような心の痛みは、看護師になつたらいつかは必ず経験する事だと思えます。ましてや、自分の担当していた患者さんが命を落としたらもつとシヨックだろつなと思えました。でもその痛みから救ってくれるのもま

た、患者さんなのだろうということ、母は教えてくれました。「患者さんからね、ありがとございましてと言われた時が一番嬉しいよ。信頼の言葉をかけてもらった事が一番なんだ。あと、赤ちゃんの誕生。生まれた瞬間を初めて見た時は、すごく感動した。生まれたての赤ちゃんを取り上げ、産湯に入れた日の事は今でも覚えてる。」まだ若くういういしい母の感動がその当時のまま、伝わってくるようでした。何より「ありがと」の言葉を患者さんから言つてもらえる母は、素晴らしい人なんだ、と誇らしさでいっぱいになりました。生まれてくる命、つなぎとめた命、消えていく命。尽きることのない命のリレーにかかわることのできる喜び。そしてその尊さ。重み。医療の現場の難しさと厳しさを学んだよ

うな気がします。ただの憧れではいけない、しんのようなまっすぐで強い何かが必要とされているんだ、そう思いました。私には曾祖母がいます。寝たきりなので体が思うように動きません。おむつ交換を手伝ったある日、「痛い。」と小さく曾祖母が叫ぶのを聞きました。寝たきりの人の介護は実際に体験してみると大変だということがわか

りました。この時も、母は落ちていて手本を見せてくれました。その手際の見事さを目にした時、改めて看護師としての母を尊敬する気持ちが強まりました。と同時に介護の技術の重要さをも実感しました。

私が看護師になるには、まだまだたくさん学ばねばならないし、理解しなければならぬところが無限にあります。けれどだからこそ、いつかは母のような立派な看護師になることを目指して、幾つもの坂道をしっかりと踏みしめながら、歩んでいきたいと思えます。

掲載にあたっては、原文のまま掲載させていただきました。



主張発表する鶴田さん

## 福嶋四郎氏が

### 旭日双光章を

### 受章されました

11月6日、自治功労者・元町議会議員 福嶋四郎氏が旭日双光章を受章されました。

福嶋氏は、昭和42年4月に町議会議員(当時村議会)に初当選し、以来平成15年4月までの9期36年の永きに亘り、その優れた識見と政治手腕を遺憾なく発揮され、民主議会の確立をはじめとする議会運営の各般に尽力されました。



また、その間数々の団体の要職を歴任し、現在も町社会教育委員長をはじめ、都市計画審議会会長など、多くの要職に就かれ、多岐の分野に亘り町勢の発展に尽力されていきます。

これら多くの功績が認められ、このたびの受章となりました。今後、さらなる活躍をご期待いたします。

